

参考文献

- 中村俊夫・中井信之（1988）「放射性炭素年代測定の基礎－加速器質量分析法に重点をおいて－」地質学論集、29、83-106。
- 中村俊夫（1995）「加速器質量分析（AMS）法による ^{14}C 年代測定の高精度化および正確度向上の検討」第四紀研究（投稿中）。
- 吉岡恭平・工藤信一郎（1992）「宮城県仙台市野川遺跡の調査」考古学ジャーナル、349、40-44。

- Nakamura, T., Nakai, N., Sakase, T., Kimura, M., Ohishi, S., Taniguchi, M., and Yoshioka, S. (1995) Direct detection of radiocarbon using accelerator techniques and its application to age measurements. Jpn. J. Appl. Phys., 24, 1706-1723.
- Niklaus, T., R. (1991) CalibETH 1.5b, Program for calibration of radiocarbon dates. Institute for intermediate energy physics, ETH, Zurich, Switzerland.
- Stuiver, M. and Pearson, G. (1993) High-precision bidecadal calibration of radiocarbon time-scale AD1950-6000BC. Radiocarbon, 35, 1-34.

VII 考 察

1. 野川遺跡出土土器の編年的位置付けについて

草創期の土器編年についてはいくつか提起されてきたが、その一つに隆起線文系→爪形文系→押圧縄文系→多縄文系という考えがあった（鈴木：1969）。しかし近年の発掘資料の増加によって、複雑な状況が提示されている。たとえば、爪形文は隆起線文土器や多縄文土器と組み合わせられて施文され、爪形文土器群そのものは存在しないという見解もある（大塚：1982）。しかし一方で、青森県鴨平2遺跡（春日：1982）・岩手県大新町遺跡（千田他：1986他）などのように、爪形文土器を単独で出土する遺跡もある。

宮城県内では現在のところ、当該期の遺跡としては9遺跡が知られている程度であり、出土している土器片も、それぞれ1点ないし数点程度である。しかし岩出山町の座散乱木遺跡からは、爪形文・絡条体圧痕文・表裏縄文土器の出土層の下層から羽状縄文土器が出土しており、色麻町の大原B遺跡からは、口唇部に絡条体圧痕がつけられた微隆起線文土器が出土している（加藤他：1990）。また多賀城市の志引遺跡でも、爪形文土器と微隆起線文土器とが共伴する可能性が報告されている（鎌田：1984）。しかし、資料数が少なく、これまで知られている資料のなかでの編年的位置付けについては難しいものがあったといえる。

今回の野川遺跡の資料には、絡条体圧痕土器、縄文圧痕による土器、縄文圧痕と爪形文が施された土器などがみられ、その構成には各種の施文方法が考えられる。これらの土器群は宮城県内では初めてのものであり、出土数は約30点と少ないものの多様な文様のバリエーションをもっている。しかし、類似した文様・施文方法をもつ遺跡は広範囲に広がっており、しかも比較できる資料も少ないことから、野川遺跡の土器を地域性の面からとらえるよりも、全国的な視点で比較検討することで編年的位置付けを考えてみたい。

当該期の遺跡として野川遺跡に近い内容をもつ遺跡として東北地方では、福島市の仙台内前遺跡（武田：1988）・南諏訪原遺跡（（財）福島市振興公社：1991）、山形県高島町の日向洞窟（佐々木：1971）・一ノ沢洞窟（加藤：1962）などがあげられる。この中では「ハ」字形爪形文と多縄文土器が伴っている点で、仙台内前遺跡・日向洞窟に近いものと考えられる。「ハ」字形爪形文と多縄文の共伴例としては、埼玉県西谷遺跡（栗原他：1961）・新潟県小瀬ヶ沢遺跡（中村：1960）などがあるが、東京都多摩ニュータウンNa426遺跡では隆起線文系土器との共伴例がある（原

川他：1981)。「ハ」字形爪形文については、隆起線文系土器と爪形文系土器をつなぐものとしていわゆる爪形文土器とは別に考えられているが、今後共伴関係をもつ資料が増加することで「ハ」字形爪形文の系譜についてあきらかになってくるものと思われる。

No695 のような短縄文圧痕による土器については、新潟県壬遺跡資料(国学院大学：1982 他)に類例があり、No453 のように爪形文と押圧縄文が組み合わされて施文されている土器については、新潟県の本ノ木遺跡・小瀬ヶ沢遺跡資料に類例が求められるようである(小野・鈴木編：1994)。同じ爪形文＋縄文押圧土器や回転縄文では、埼玉県宮林遺跡資料(宮井他：1985)に類似している。また絡条体圧痕土器は、埼玉県西谷遺跡(栗原他：1961)・水久保遺跡(小林他：1979)資料に近く、西谷遺跡には、口唇部に絡条体圧痕がつけられた土器がある。

No203～205 の土器にみられる羽状を呈する文様の施文具としては、刻みを入れた軸による圧痕か、コイル状に巻かれた絡条体の側面圧痕によって施文されたと考えられる。この施文具については、太めの3本撚りによる自縄自巻によって施文されている可能性もある。自縄自巻によるものであれば、静岡県仲道A遺跡資料(渋谷：1986)に近いものと考えられる。自縄自巻による施文について筆者は実見していないが、この資料は、一つひとつの条の端の部分が角張っており、圧痕の深さが一様であることなど、これまで自縄自巻として報告されている資料とは若干の違いがみうけられ、なお検討を要すると思われる。

野川遺跡の土器を文様構成からみると、2基の土坑を中心とした4ヵ所の遺物集中地点は大きく2つに分けることが出来る。土坑周辺のN-3～8区については、短縄文の押圧が羽状を呈する土器が主体となっているが、N-12～15区については、絡条体の側面圧痕による土器が主体となっている(第6図)。こうした出土状況からみて、絡条体圧痕文による土器群と縄文圧痕による土器群には時間差があるものと考えられる。

遺跡間の比較でいえば、仲道A遺跡や新潟県の室谷洞窟(中村：1964)の資料よりは古手で、本ノ木遺跡・小瀬ヶ沢遺跡・宮林遺跡に近いものと考えられる。編年的位置については、隆起線文系土器群以降のある段階に位置付けられるものとするが今後の資料の増加をまちたい。

※宮城県内出土の草創期の土器について分類・整理すると下表ようになる。

	座散乱木	馬場壇B	馬場壇C	大原B	鹿原D	小梁川東	除	志引	野川
隆起文系		○		○	○	○		○	
押圧縄文									○
絡条体圧痕	○		○	○					○
回転縄文	○								○
爪形文	○							○	○

※除遺跡で出土している土器は無文土器である。

※これらの遺跡以外に、柴田郡川崎町の下窪遺跡から隆起線文土器が出土しているとの報告がある。「宮城県柴田郡川崎町下窪遺跡出土の隆起線文土器について」宮城史学13号(後藤勝彦：1990)